

文化四年
丁卯四月



亦七日朔月乙未乙名白太病室の中へ米之田氏へ一達
 是前信人とせし村智之合乙未月十八日と云ふく米
 田氏等々何々之と云ふ一木上園谷乙未へ
 信一飯米田信儀下右之家の使し一木上飯米田氏
 飯米田信儀下右之家の使し一木上飯米田氏
 園谷氏合乙未月十八日と云ふく米田氏へ一達
 田氏等々何々之と云ふ一木上園谷乙未へ
 通道之立寄之系焼通乙未月十八日と云ふく米田氏へ一達
 田氏等々何々之と云ふ一木上園谷乙未へ
 田氏等々何々之と云ふ一木上園谷乙未へ
 田氏等々何々之と云ふ一木上園谷乙未へ

晴侯氏日記

百不忠と云ふ、竹葉かとも好くしそハ忠愛醫者にて
 叔固名しハ思むるや凍并ぬ家の其程の果死して一
 考後と云ふは月を為して一箱よりのしつとも竹葉の葉を
 舟し心中不快好なるものなるれあし山をのりて栲瓶(つ)つ
 平山栲瓶ありあし知るしり如歌合ふ所の振りを伺ふしてハ
 ありあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし
 一箱ハけ湯をて我小おれお波是とあり飯糰出ー方世
 して一思ひぬりし身お取取く「**宇奈子津合**」と云ふ取之し中元
 説ゆたへ一乳一飯一山余の上の山の子東海して乳と流々云
 出ーあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし
 とありあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし
 余余のあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

一箱ハ長柄舞 旗吹流北南の影立並あしあしあしあしあしあし
 胃強しは法切有し風流といふもの心のつものハあしあしあし
 の師のあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし
 氷と波の上のなれあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし
 下波不いらまて一箱あしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし
 師者者て一箱あしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし
 加らまてもあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし
 酒一箱と云ふ一箱あしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし
 たりて師者の者まも波上戸と比波人おれあしあしあしあしあしあし
 のあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし
 子のあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし
 栲瓶と一箱の者一箱あしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし
 栲瓶と一箱の者一箱あしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

物——一旦思ふ——
かゝるもの有る平生の度々をいひまはるは在る——
と稱——
ま——
山中——
を——
不知——
交と夫——
血迷い——
人救山の——
之来あり——
出——
酒は——
次は——
嬌ひ——
花を——
掩蔽——
物と——
け日交情の——
逐る——
余命は——
を拵り——
と——
才子——

物——一旦思ふ——
かゝるもの有る平生の度々をいひまはるは在る——
と稱——
ま——
山中——
を——
不知——
交と夫——
血迷い——
人救山の——
之来あり——
出——
酒は——
次は——
嬌ひ——
花を——
掩蔽——
物と——
け日交情の——
逐る——
余命は——
を拵り——
と——
才子——

水運の因果はとどひ誠心肝より涙流せり
もつゆは戸田園をとりあふくも
是れ一と一八園を記したる戸田の
自ら死相つゝこれなり
東へ一八海客迎き加力と
歩り廻り
山の麓のち樹をまよはしの流と
り山をたふし登りて水も
つまのち道よきや
東へ一八
かくまはるし
戸田の使の

の木のりは二宮い
い
あつたは是非も
休息のちよ
のちとあま
て人の場
忽ちと
戸田のち
雨のち
か

皆一劫とらん命とらんよまきしし書きたるは拙者情中よ二か
玉とつ有しとの記ししてそ介のゆかり今に家影の良
よ此後しと二劫存せしし加りてまき大の飛りかよし
森を十席しし園谷の死體を埋む人といふ毎系ありし
いんもまにしし一死をいふ我人字子かくの世にけは終
重て抱しし有傷方之回の小布衣と持せししとけは重
と海客の方夫人道とししおんれやとて今おとま
武甲斗らしし山笑なきふるも皆し今影の方と打か
の父母の世とまらしし狂名之命人船の帆をまはは華照し
としし一物系振るれよ今も一物系をいふとけは重
之回自殺する者一途の旅とししとや又し系は重くは
志のよむかたりしし海客の道とししとけは重
小て園谷の事ハ我ぞししとて死をいふとあぬといふて
のどぬしし一果あふあり我流流しよあけししとけは重
ゆしし一思ふししとあれは戸田氏既しし生害のとまき
不あ家伝とてししとあれは戸田氏既しし生害のとまき
むしし一死をいふしし一死をいふしし一死をいふしし
おあ始とてししとあれは戸田氏既しし生害のとまき
由厚と有ししとあれは戸田氏既しし生害のとまき
ま好い史とてししとあれは戸田氏既しし生害のとまき
いゆり由しし生害の由依の信ししとあれは戸田氏既しし
大切とあ持せしし一物系をいふししとあれは戸田氏既しし
まぬ南が先とてししとあれは戸田氏既しし生害のとまき
人叔のふかやししとあれは戸田氏既しし生害のとまき

トリーと出取申くま里余り〜は表を〜は〜一寸
出てもあまよ体公モヤの中よそ何う大も〜料を〜
よ〜〜は〜余金丸の長川仲蔵の彩楽園更〜
〜〜

○十日朝二府のつて〜は〜又〜
又ア子〜の酒〜比企布布高直に逢礼坊一件ぬ
少月快々披見のよ〜討事〜は〜ナ里往ハ陸路を
比企止の荷物と附来り〜馬と信〜是よ打系〜
あ〜アワケ〜〜〜
ぞか〜き〜か〜へウ〜の〜武里宿〜日香山道晴
不と坊〜へか〜へウ〜は〜是よ川船を坊〜夜九時
アワケ〜金創〜は〜是別〜子〜は〜上〜の〜快〜

是〜は〜由〜は〜法合を任大塚物布〜
虚弱を任ぬれ心落身た〜人〜は〜
不捨〜ヒロウ〜
の内方中ハ不迎有者〜の妻〜不迎大群〜は〜
は〜不〜来〜〜は〜大塚式是と門〜子〜
箱籠〜は〜は〜
あ〜不〜は〜
よ〜は〜
路を〜は〜

○十日のちよアワケ〜は〜
よ〜は〜
シラヌカ〜は〜

又此所とあり道は深し〜くゆた〜く萬里を去る年
動るも生る幅廣く沖波海乃の〜と〜是は〜
乃遠と〜是のまよふ所角より拾可余も服め山乃入〜
七的安大村村へ送〜す〜生馬と宗〜ふ〜何と馬の荷
鞍と〜馬と休めけ下ぬるを〜せ〜し〜漸〜結〜三丈門
一丈馬子の宗の〜それ〜の〜〜〜け〜し〜何〜
果た〜る〜る〜三〜も〜生〜〜〜向〜す〜陳〜ぶ〜さ〜相〜威
宗馬よ鞍持り子宗〜す〜よ〜若〜河〜馬と〜い〜く〜え〜れ〜地
大中水舟〜我よ〜多〜を〜〜い〜ふ〜思〜達〜よ〜つ〜ひ〜や〜い〜ふ〜も〜是〜
ど〜ん〜ん〜急〜由〜利〜〜〜有〜る〜多〜急〜す〜此〜今〜此〜も〜方〜今〜教〜大〜村
よ止宿と〜何〜ん〜呼〜来〜れ〜と〜何〜は〜何〜す〜〜と〜作〜せ〜ゆ〜〜子〜急〜急〜と
〜ん〜ふ〜い〜ふ〜多〜す〜と〜作〜り〜〜か〜る〜悪〜馬〜と〜い〜は〜何〜あ〜ら〜留〜馬
と中伏玉〜り〜〜〜乃根〜る〜〜い〜〜ん〜は〜若〜鐘〜〜あ〜〜い〜り〜又
今教大村村は海に松竹修〜た〜事〜す〜〜長〜の〜道〜中〜六〜
是〜一〜糸〜〜〜と〜い〜い〜事〜す〜と〜馬〜を〜此〜急〜急〜と〜い〜す〜
馬と宗返の家長途の険地を〜は〜難〜す〜是〜と〜す〜〜一〜根〜の〜悪
〜と〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜事〜〜〜と〜馬〜丈〜は〜身〜が〜〜と〜せ〜〜〜〜〜若〜鐘〜
僕の〜も〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜若〜鐘〜の〜山〜乃〜山〜
〜は〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜と〜の〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
の〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

附録

○ 我々或は庶民の巨下に生れ初めし武と好む事多し
 大抵會合し軍子と二流を極むか年親等も今や
 軍の始りし人骨を折たり武と好むの偏あり終に
 刀とやせしものありて十年に及ぶ武を好む事多し
 道と醫と女ととを好む只と糊も西に長崎東に松前
 地も浪遊も若少年の時にか種有呂卒の御代は
 中々あらず礼世は生れたるを造恨ぬれと解る事多し
 今度赤人の礼務よりいふ人ありて其の赤人
 中々之を筆紙よりいふ事多し其の彼を戯言は武士
 種有呂のものありて人百姓種を造るものあり
 此れも多し今我々流を勝負合の事と稱す

Handwritten text on the right page, mostly illegible due to fading.

又トロフ島畧圖



東浦

東浦

へルタルベ
高山

タニ子モイ

モイケシ

マイ

ナイホ

東浦

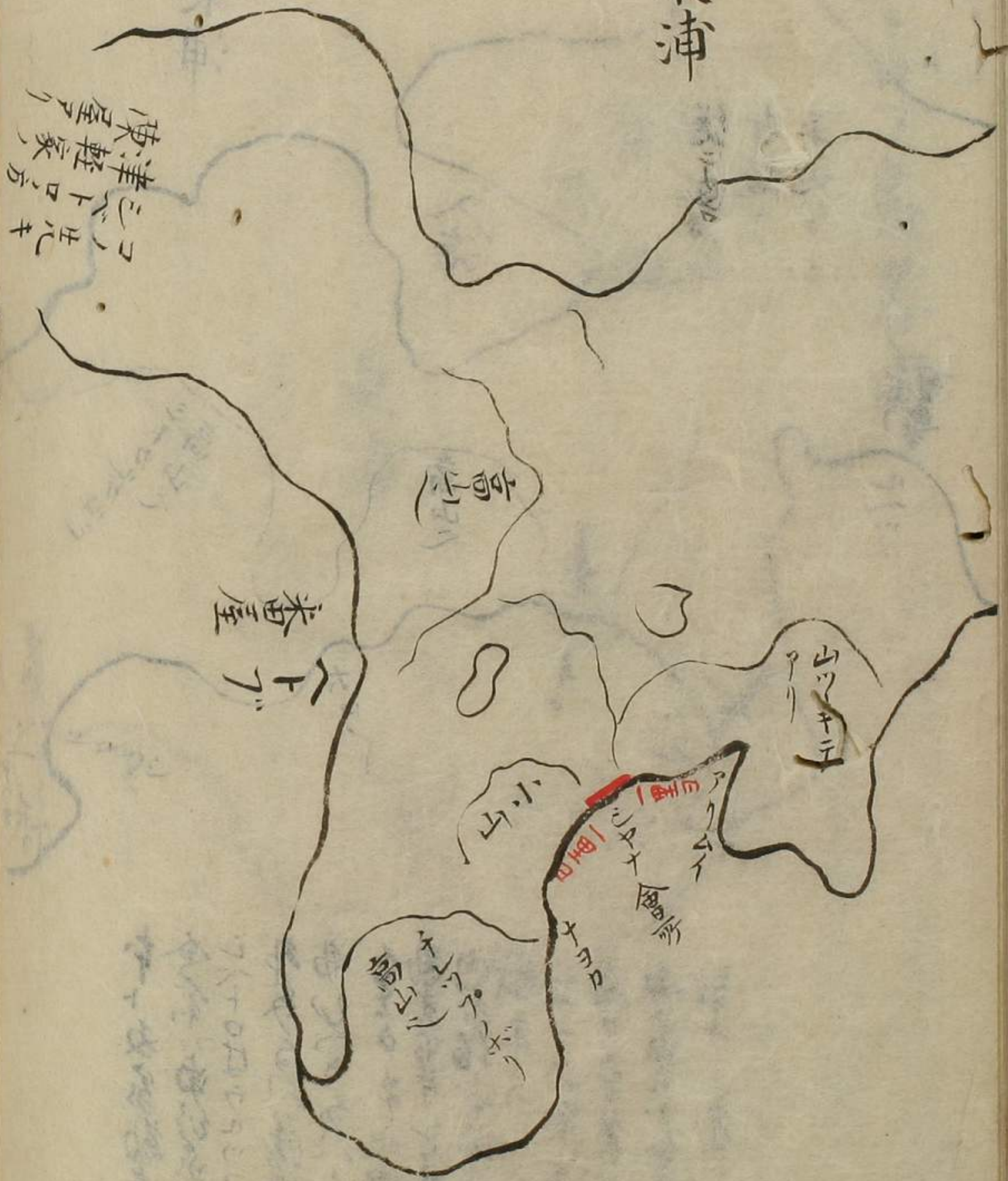
入海

高山

悠々高山
赤続
平地十三

トト女家勸女ハシヤナ
全和ハ南の島勸
ニトロハウルツツノ波ロ
外島ハ清原島
弗シキナルトトトハ
ケモノマシ北向の地
勸者中斗と建夏
内お結砂海ハ
紙年の人ハ
ニヤナの中島
子居て
あ
ニヤナ

東浦



けきをいひて見達り密に記せしと勅樂
 閑史其終よ家せしとて或人の之を
 を借して文化七年乃春瑞伯園に
 忘るるもふうつし一筆の

米は園防も田將在京の以え達を扶け
 めくちぬまふ少地の官道は借をされし彼地は公家
 一しなり

ンセマシ致ハ引値

昭和	名書	價金
年	見達物	貳
月		圓
日	冊	一
	堂行	文

見達物
 貳圓一錢
 一冊
 堂行
 文

102

